

岩手大学同窓会連合会報

No.1 2009年8月 発行

同窓会連合会長あいさつ 岩手大学長あいさつ

各同窓会長あいさつ
設立記念講演会要旨

- 各同窓会の情報
- 岩手大学の情報



岩手大学同窓会連合会長あいさつ

会長 太田原 功



平成21年6月1日、岩手大学開学60周年記念日を期して「岩手大学同窓会連合」が発足致しました。当日は、岩手大学名誉教授、現・旧岩手大学教職員各位、4学部同窓会関係各位のご臨席を賜り、記念式典、記念講演会並びに祝賀会を挙行致しました。

岩手大学同窓会連合は「4学部同窓会を正会員とし、岩手大学を特別会員とする連合体」であることを会則に謳っております。「会員相互の親睦を深め、会員の総意に基づく事業等を実施することによって、岩手大学の発展に寄与するとともに、地域社会に貢献する」ことを目的として発足しました。

各学部同窓会の歩みを簡単に振り返って見ます。まず、農学部同窓会北水会は、4学部同窓会では最も古く設立され、明治36年9月盛岡高等農林学校校友会として発足し、昭和27年5月農学部北水会と命名しました。設立後106年を経過した現在の会員数は約20,000名であります。工学部同窓会一祐会は、昭和17年9月盛岡高等工業学校同窓会として発足し、昭和28年6月工学部同窓会一祐会と命名しました。設立後67年を経過した現在の会員数は約22,000名であります。教育学部同窓会北桐会は、昭和28年3月学芸学部同窓会として発足し、昭和41年教育学部同窓会北桐会と命名しました。設立後56

年を経過した現在の会員数は約19,000名であります。人文社会科学部同窓会七友会は、昭和56年3月に発足しました。設立後28年を経過した現在の会員数は約6,000名であります。以上、4学部同窓会同窓生の総数は平成21年現在約67,000名を数えております。

昭和24年6月1日、農学部(150名)、工学部(120名)、学芸学部(甲類120名、乙類360名・2年制)の3学部構成で発足した岩手大学が、昭和52年5月人文社会科学部を新設して現在の4学部構成となりました。創立以来60年、平成21年4月現在の4年制学部学生定員数は1,075名であり、発足当時の約2.8倍であります。更には、大学院研究科博士前期課程、大学院研究科博士後期課程設置の他、各種の教育研究施設、地域との研究連携施設等が設置されており、質・量ともに大学発足当時とは比較にならない程充実した大学に成長しておりますことは、卒業生として誠に喜ばしく、かつ、心強い限りであります。

岩手大学同窓会連合が、会員相互の連携を深め、大学発展の一端に寄与する役割を担ったことを重く受け止めております。会員組織の皆様方の全面的なご協力を切にお願い申し上げます。

岩手大学長あいさつ

学長 藤井 克己



かねてより念願の岩手大学同窓会連合の設立、おめでとうございます。

岩手大学は60年前、昭和24年6月に新製の国立大学として誕生しました。発足当時は学芸学部、工学部、農学部の3学部のみ、4年生課程の学生定員は1学年わずかに390名というもので、新入生の学ぶ教養課程の校舎もなく前身3学部の教室を借用しながらのスタートだったといえます。やがてキャンパス中心部に木造校舎4棟が建てられ、12年後には学芸学部が上田地区に移転するとともに、その16年後には人文社会科学部が設置されるなど、総合大学としての態様も次第に整いました。今では、全学部の学生5千名が自然豊かな一つのキャンパスで4年間を通して学習するという、全国でもあまり例を見ない絶好の環境に

生まれ変わっています。

平成16年4月、つまり今から5年余り前、岩手大学は国立大学法人に移行しました。その折『岩手の“大地”と“ひと”と共に』を合言葉に、人材育成を重視し、地域に開かれた大学づくりを目指して、学部の枠組みを越えた様々な取り組みを展開してきたところです。現在、岩手大学としての卒業生は5万9千人を超え、前身の専門学校などの卒業生数をはるかに凌駕しています。

このような実勢を踏まえ、4学部同窓会の一層の連携を図るため、創立60周年を期して同窓会連合を設立する運びとなりました。ここに至るまでの4同窓会のご理解とご尽力に感謝申し上げますとともに、今後も同窓会連合に対する御支援をお願い申し上げます。

各同窓会長あいさつ



七友会

会長 佐原 和典

岩手大学同窓会連合の設立を心よりお喜び申し上げます。

七友会は、岩手大学待望の文系学部として昭和52年に創設された人文社会科学部の第1期卒業生によって、昭和56年3月に設立されました。創設当初の2コース6専攻と学部教職員が、学部を支える7つの柱となって互いに親睦を深め、学部発展のために協力していく…という願いをこめて「七友会（しちゆうかい）」と命名されました。会員数は、やっと6千名を越えたばかりですが、就職先は学部の特色を生かして公務員から一般企業まで多岐に渡り、勤務先も国内に止まらず世界中に広がっています。しかし、遠く離れば離れるほど大学時代の友人や母校のニュースは懐かしさを増すもので、同窓会はそうした会員の思いを大切に考え活動しているところです。この度、同窓会連合が設立されたことは、学部の枠に囚われず会員相互の繋がりを強めるとともに、その力が岩手大学の発展ばかりでなく、地域社会への貢献にも大きなものになると期待しているところです。今後の活動に御理解と御協力をお願い申し上げます。



北桐会

会長 藤原 隆男

岩手大学同窓会連合の設立をお慶び申し上げます。

この度の岩手大学同窓会連合は、各学部の同窓会を会員として組織されたものであります。学部毎の同窓会は学部・大学院の卒業生を会員として組織され、会員相互の親睦を図ることを中心とした事業活動を行ってきました。このために、各学部の同窓会は大学の同窓であり、学部を超えて親睦を図り、大学の発展に貢献しようとする共通認識に乏しかったことは否めませんでした。

最近の大学を取り巻く環境は大きく変化しました。特に、国立大学の法人化にともない、大学はこれまで以上に独自性を追求してその特色を示すことが求められ、また、学部から大学を中心とした大学運営へとシフトしてきました。このような時に、学部を横断する同窓会連合が設立され、大学のサポーターとしての役割を果たすことが期待されています。同窓会連合が岩手大学の発展に貢献できることを願ってお祝いの言葉といたします。



一祐会

会長 太田原 功

岩手大学同窓会連合が「ようやく」発足致しました。「ようやく」の主な原因は一祐会の次の3点に関する「こだわり」でありました。即ち、全学同窓会が「協議機関であることを標榜する名称」、決定機関である理事会構成員数は「四同窓会からの選出委員が半数以上」、その意志決定は「全会一致」が望ましい、ことでありました。

全学同窓会構想実現のための懇談会および準備委員会のワーキンググループがこの問題に精力的に対処されて、最終的な合意が得られましたことを感謝申し上げます。四学部同窓会にはそれぞれ長い歴史と実績があります。従来、連携の機会が殆どなかった五者が、会則に謳ってありますように「会員相互の親睦を深めること」を基本として「総意に基づく事業等を実施」し、「岩手大学の発展に寄与し、地域社会に貢献する」ことを、一祐会は皆様とともに精力的に目指して参りたいと存じております。



北水会

会長 桑島 博

平成18年3月に、前平山学長さんからの全学同窓会連合設立についてのご提言を受け、各同窓会における検討を始め、学長さんと各同窓会長との話し合い、そしてワーキングメンバーによる度重なる細部検討を経て、めでたく岩手大学同窓会連合の設立を見ましたこと、大変喜ばしく存じます。

四つの同窓会は、それぞれ設立母体や発足の歴史が異なり、個性的な経緯をたどって発展してきましたので、いろいろな事情を超えて連合組織体を設立することについて、様々な意見があったわけですが、連合の意義は一点、各同窓会の永劫の発展・充実にあるとの思いを強くいたしております。

そういう意味におきまして、新たに設立いたしました「岩手大学同窓会連合」が各同窓会の抱えております様々な課題の解決に役立つような、実効性のある組織体として、その存在を確かなものにしていくよう、互いに協力しあうことが重要であると思っております。

同窓会連合の設立を契機に、この連合の成功とそれぞれの同窓会の充実・発展をご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

七友会

人文社会科学部
同窓会

「岩手から『元気発信』」

テレビ岩手報道局長兼報道部長

遠藤 隆 (S56 卒)

1981年6月岩手大学人文社会科学部設立一期生として入学。東京出身だが、都内の大学を落ちまくり、5月に入試が行われた人社に入学。一期生はほとんどが、入試失敗組。負け組からの大学生活。しかし学生が1学年200人しかいなくて先生との関係が濃厚。山崎達彦先生との出会い。研究室の1対1の授業で社会と自分との関わりを教えてくれた。

テレビ岩手の入社試験を受験。3人採用に200人が受けたが、運よく受かり、報道部に配属。当時のテレビ岩手のニュースの視聴率は5%前後。IBCは20%以上。打倒IBC目標。クラブ記者ではなく、市民・村民の話からニュース企画、ドキュメンタリー番組を作る手法を蓄えていった。そこでは当局発表を鵜呑みにせず、誰のための報道か咀嚼する癖が。

岩手大学で基礎を学んだことが役立った。会社も本気でニュースでIBCを打倒しようということになって夕方にワイド番組、「5きげんテレビ」をスタート。1996年。IBCも同様の番組をスタートしたが、経費が続かず1年で終了。以降5きげんテレビとプラス1が二人三脚で頑張り、今

年まで10年連続視聴率1位に。

岩手大学人社は負け組の学生を本気で受け入れてくれた。偏差値で勝ち負けに区別せず、何を求めているか、いわばオーダーメイドで接してくれた。それが一生の財産になっている。未曾有の不況でどの企業も大変。もちろんテレビ岩手も大変。しかしこういう時代だからこそ、ニュースプラス1いわてでは今年「元気発信プラス1」をキャッチフレーズに輝いている人を発掘する。4月には岩手大学の新入生などを取り上げた。また学生を応援する「就活ノススメ」といった企画も放送している。厳しい現状は認識しながらも、やはり、声なき声を吸い上げる姿勢で視聴者に情報を提供していきたい。



一祐会

工学部
同窓会

「鉄道会社に就職して」

盛岡ターミナルビル(株)取締役・ホテル総支配人

竹澤 久嗣 (S45 卒)

私は昭和41年に岩手大学工学部機械第二学科に入学しましたが、今でも強く印象に残っているのは同寮寮での生活です。寮は木造2階建ていまでも壊れそうな古い建物に300人近くの寮生が寝起きを共にしておりました。入寮して驚いたのは建物がオンボロであったのは勿論ですが、「ストーム」と称して酔っ払い共が真夜中に大声を出しながら部屋に侵入してくる事です。この「ストーム」が連日連夜続くわけですから寝不足になり授業の出席にも影響してしまいました。同寮寮の強烈な体験から大学生活、新たな人生が始まったように思っています。

当時の日本は東海道新幹線の開業、東京オリンピックの開催などで活気に溢れ国内総生産は驚異的に伸び国民所得も倍増し高度成長の道をひたすら突き進んでおりました。反面、光化学スモッグなどの環境汚染やベトナム戦争、過激派など政情不安も現れておりました。

私の職歴ですが昭和45年に日本国有鉄道に就職し蒸気機関車やコンピュータ、貨物駅の仕事をを経て国鉄民営分割の激動を体験しました。その後はJR東日本盛岡支社の営業部、盛岡駅、三陸鉄道(株)、盛岡ターミナルビル(株)と技術

部門から離れた仕事を経験してまいりました。

昭和57年の東北新幹線開業と東北自動車道の開通は地域振興に大きな役割を果たして来ました。移動時間の短縮は交流人口を飛躍的に拡大させましたし、駅ビルなどの商業施設、ホテルや旅館などの宿泊施設、スキー場やゴルフ場の観光・レジャー施設などの建設、誘致企業の進出により岩手は大きな変貌を遂げました。

私の拙い人生経験から学生の皆さんに申し上げたいことは、無事に大学を卒業することと今から社会人になる心構えを持っておくことです。社会人になり自立することは想像以上に大変な事ですが、今現在を大切に有意義な学生生活を送って下さい。

最後となりますが母校岩手大学と同窓会連合のご発展を祈念して終わりと致します。



北桐会

教育学部
同窓会

「戦後、岩手の教育と教員養成の道」

(財) 岩手教育文化センター理事長・岩手大学名誉教授

石川 桂 司 (S29 卒)

●初めに、「北桐ホール」名称の由来

学部創基百周年記念行事の一環として、卒業生等から寄せられた寄付金と、師範学校の先輩が多年にわたって開墾した農地や植林した山林等の岩手師範学校校友会財産をもとにして、『岩手の教育・文化の発展に寄与する』ことを目的とする公益財団法人「岩手教育文化センター」の設立を決定（昭和54年に法人設立が認可）。その20周年記念として実現したのが、「北桐ホール」。

●教育学部卒業生の歩んだ道

- ・明治以来、県内唯一の教員養成機関としての男子師範・女子師範・青年師範学校の卒業生は、岩手の学校教育現場の担い手であった。
- ・岩手大学学芸学部以後、学生・教員ともに、岩手の教員養成機関としての自負と責任を感じる。

●戦後岩手の子ども・教育の歴史と、学部卒業生の果たした役割

- ・戦後、昭和20年代・30年代の岩手の教育実態は、貧困とベビーブームに多くの問題が山積していた。

- ・当時、日本の「チベットと言われた岩手県」、「岩手のチベットと言われた岩泉地区を代表とする山村僻地の教育」が最大の課題
- ・悪戦苦闘して、岩手独自の「教育振興運動」とともに、岩手の教育の向上につくし、今日の教育の基礎を築いた学部卒業生の活躍がある。
- ・今後、学校教育のみならず、生涯教育の担い手として、また芸術・文化の面での優れた人材を育成する学部として、これからの新たな後輩達に期待する。



北水会

農学部
同窓会

「命の輝きを最大限に生かすことが私の使命」

社会福祉法人みやぎ会 理事長

田中 信 幸 (S44 卒)



1. 自己紹介

北海道赤平市出身。岩手大学農学部農学科 (S44年卒業)。
青森県八戸市を中心に青森県、岩手県、宮城県、福島県内に医療・介護・保健・福祉事業を展開。新病院を今年9月に移転新築オープン予定。

脳卒中予後、社会的入院、看護師、PT・OT不足、予防の重要性等社会的ニーズに対応して事業を展開。

盛岡市内に社会福祉法人みやぎ会 特養なのりの里を昨年11月に開設。総面積70haのコナラを主体とした広葉林に囲まれた敷地。地域の方の強い要望により、地域のリトルリーグ用の野球グラウンドを併設。

2. 「今ひとたび、また」

- ・私どもの経営理念である「今ひとたび、また」の意味は患者様、利用者様が病気等でどんな状態にあっても自ら治そうという気持ち

を持って頂き、「今、ひとたびまた輝くことができるよう」我々がお手伝いするということ。

- ・建物については レジャーランド施設を改装して、一般病院を運営。また、カセットテープ工場を精神病院に。その他縫製工場、小学校等の跡地を改装し、介護施設として今ひとたび、また再活用。
- ・私どもが、現在の日本の高齢社会において事業を通して感じることは、歳をとっても利用者様は女性の方がとても元気であるということ。今後の日本が少子高齢化の時代を乗り切るには、男性も女性に負けずに元気に歳をとっていかないといけない。

3. 企業が求める人材

- ・私どものサービスは「生活の場」を提供するという一方で、すべてにおいて「安心」・「安全」・「快適」を目指さなければならない。
- ・めまぐるしく変わる社会情勢の中、地域社会の様々なニーズに対応していくためには、様々な分野の専門的知識を持った人材が「連合」していくことが大事で、今回の岩手大学の「各同窓会が連合する」ということは、とても意義のあることだと思う。

七友会 Shichiyukai

七友会は1981年（昭和56年）3月に設立。岩手大学4学部同窓会のなかでは最も新しくできた同窓会です。とはいえ、学部創設からすでに30年を超える月日が流れ、卒業生も6000名余りに達するなど、確実にその歴史と伝統が形作られてきました。

七友会とは、学部創設当初の六つの専攻講座、すなわち地域文化基礎研究、アジア研究、欧米研究、行動科学研究、産業経済論研究、法学研究に教職員を加えた七つ、つまり学部全体の親睦を深めることを意味して名づけられました。その後、大学院の設置（1990年）、環境情報科学コースの開設（1993年）、さらに学部改組（2000年）を経て、現在では学部4課程（人間科学、国際文化、法学・経済、環境科学）、大学院研究科3専攻（人間科学、国際文化学、社会・環境システム）から、毎年二百余名の卒業生・修了生が本会員として社会へ巣立っています。

人文社会科学部は、今日的な「文理融合」や「総合的視野」の高等教育をめざしてきた全国的にもユニークな学部として知られています。そうした総合的な学部のもつ特徴から、社会における卒業生の活躍場所は各界広範多岐にわたっています。いまや第一回卒業生は50歳代に入って各界の中核を担う立場となっており、それに続く卒業生達も全国各地で活躍しています。とりわけ岩手において、本学部は地元元

融、マスコミ、観光、教育、地方公共団体などの様々な分野で、地域経済・社会を支える有能な人材の一大供給源となっています。

本七友会では、発足以来、積極的に学部、学生への支援を行ってきました。奨学寄付金などを通じた学術講演会等の開催、卒業生と学生の交流会や就職ガイダンス、毎年協中央食堂で盛大に行われている人社学部全体での卒業記念祝賀会などは七友会の後援によるものです。

本会の情報発信基地として開設されたHP「七友会ネット（<http://www.shichiyukai.net>）」も大変充実しています。同窓生の活躍や岩手大学の情報ははじめとする新鮮な情報を会員および社会に向けて発信していますので、ぜひご覧下さい。

本七友会は2011年（平成23）年にめでたく30周年を迎えます。現在、その記念事業を行うべく様々な計画が進行しているところです。

今も続く生協中央食堂での人社卒業祝賀会



一祐会 Ichiyukai

岩手大学工学部同窓会「一祐会」は、工学部の前身・盛岡高等工業学校（昭和14年5月設置）の第一回卒業生輩出後の昭和17年9月に盛岡工業高等学校同窓会として発足しました。昭和19年に盛岡工業専門学校に改称されましたが、その後、昭和24年に新制岩手大学が設置され、盛岡工業専門学校は岩手大学に包括されて工学部となりました。この時点での同窓生は約2500人でした。工学部同窓会として「一祐会」の名称が附されたのは昭和28年の会則改定にて行われました。一祐会の意味は「会員一緒に助け合う（祐：天の助けの意）」とのことで、同窓会の目的として「会員相互の親睦と母校の隆盛とを図り工業界並びに社会の発展に寄与することを目的」としてあります。工学部の学科増設と再編、それに年代の経過と相まって一祐会会員数も増加し、平成5年の創立50周年では約11,000人、平成21年3月時点で約22,000人の会員を有しております。同窓生は、全国に散らばっておりますし、海外にても活躍しており、地域ごとの連携を維持し交流を深めるといことから、各支部が結成されております。現在、北は北海道支部から南は九州・山口支部まで全国24支部、各学科主体として、みよし会（化学系）、電気電子情報科会、機械系科会、金属物性科会の4科会があります。

同窓会の事業として大きなものは、年1回の会報発行と5

年毎を目安とした会員名簿の発行です。会報には工学部や学科の動向・トピックスあるいは卒業生の進路、各支部やクラス会報告などを掲載し、A4版64ページ（年によって若干の変動有り）の体裁で、毎年3月に発行し同窓生諸氏に届けられます。その他に、同窓会創立記念として30周年、50周年および60周年の記念誌や記念写真集の発行を行いました。

最後に、一祐会会章を紹介します。図にあるような会章は、一祐会創立50周年を記念し、制定されました。一祐会の「一」と「祐」のローマ字を図案化したものです。また、国鳥であり岩手県の県鳥でもある「雉」が飛び立つ姿をイメージしており、一祐会の発展する姿、躍動感を表しています。



北桐会 Hokutoukai

沿革

北桐会の設立は昭和28年の3月14日、学芸学部甲類課程の138名、乙類課程の196名が第1回卒業生として始まる。30年12月に学芸学部同窓会名簿を刊行(咲山福榮編集委員長)。33年4月、正式名称を「北桐会」(佐々木盛男会長)とした。35年2月同窓会会報『北桐』創刊号を刊行。41年4月学部長が教育学部に改称、それに伴い本会も「岩手大学教育学部同窓会(北桐会)」となり今日に至る。51年9月学部創期百年記念式典を行う。平成15年10月記念誌「北桐50年の歩み」を発刊。同年11月本会創立50周年記念講演会並びに式典を行う。「壬生義士伝と私」という題目で作家、浅田次郎氏による記念講演が盛岡市民文化ホールを会場に行われる。

トピックス

平成13年6月、当時の文部科学大臣による「大学の構造改革の方針」(遠山プラン)が発表され、一都道府県一教員養成学部の体制の見直しの提示で学部の危機が生じる。14年6月に北桐会は学部と連携し「岩手の教育と岩手大学教育学部との関わりを考える会」(佐々木俊夫会長)を結成。広く県民に対しアピールし、学部存続の街頭署名・募金活動を展開。この活動では本会の15,504名と岩手県PTA連合会の46,572名、合わせて61,076名分集まる。これらの署名と

要望書を岩手大学長へ同年12月に提出。学部は本会の取り組みを契機に岩手の教育に根ざした地域連携推進の道を目指すことになる。

学部学生の支援

スポーツ及び芸術活動の資金援助を行う。また、教員採用試験対策の一環として、面接指導を平成16年から継続している。合格率向上へ寄与。

分収造林

本会創設30周年記念事業として、昭和60年青森営林局と50年間の分収造林契約を結ぶ。岩洞湖周辺の国有林を借用し、唐松の苗木12,300本を植樹。毎年、武田豊蔵先生、奥武次郎先生のご指導のもと現地視察を行う。平成46年にはどんな同窓会林になっているだろう。



北水会 Hokusuiikai

本農学部の前身である盛岡高等農林学校が設立された明治35年(1902年)当時、東北地方では凶作が続き、農民は疲弊し、農村は荒廃し、冷害、凶作の克服が大きな社会問題となっておりました。そのため明治政府は冷害に打ち克つ農業の基礎を作り、地域の農業指導者を養成することによって東北の農業を確立し、振興させること、そしてそのことが広い意味で日本農業の底辺拡大につながる道であると考え、日本で最初の農業専門学校、すなわち盛岡高等農林学校を開校させました。創立から百余年、明治、大正、昭和、そして平成へと移りゆく中で、今や東北地方は日本の食料生産基地として重要な地位を占めるに至りました。

この間、盛岡高等農林学校は盛岡農林専門学校(昭和19年)、岩手大学(昭和24年)と体制を変えながら、1万9千名にのぼる卒業生を世に送り出しました。これらの人々は学術文化、産業、政治、行政など各方面で顕著な業績を打ち立て、東北農業の振興と発展に多大の貢献を果たしてきました。「雨二モマケズ」などの詩作で知られる宮澤賢治は大正7年農芸化学科の卒業生です。

盛岡高等農林学校以来の同窓会は、昭和27年岩手大学農学部の初の卒業生誕生を機に「北水会」と改称されて、今日に至っております。

本同窓会はその時代、その時代、母校の充実に協力し

ながら様々な支援活動を行ってきました。創立100周年(2002年)にも数々の記念事業を実施しました。その中で、同窓会が創立25周年記念事業(昭和3年)として建設し母校に寄付した会館の改修を行い、建設当時の雰囲気を残しつつ新しい内部設備をもつ「百年記念館」を新生させたことなどは、本同窓会の歴史をつなぐ感慨深い出来事です。現在、北水会事務局はこの百年記念館の一室にあって、同窓会の事務を運営しております。(北水会、桑島博会長の挨拶より引用)

農学部・「北水会」の沿革

- 明治35年3月 盛岡高等農林学校創立
- 明治36年9月 校友会(後の同窓会)創立
- 明治38年4月 第1回生(卒業生)卒業 各学科別研究会の活動
- 大正9年4月 盛岡高等農林学校同窓会設立
- 同年12月 同窓会報第1号発行
- 昭和24年6月 岩手大学発足
- 昭和27年5月 同窓会を「北水会」と改称 現在に至る

「北水会」の由来

「ゆく川の流れば絶えずして
しかもとの水にあらず」
(朝長明「方丈記」)
の精神をモットーにした名称



創立100周年記念建立
宮沢賢治 石像
(教育学部 藁谷 収 教授制作)

岩手大学 創立60周年記念 事業開催

岩手大学では、平成21年6月13日(土)に創立60周年を記念し、記念講演会、記念式典、記念祝賀会、第1回ホームカミングデイ(卒業生の皆様に母校岩手大学に帰ってきてもらい、学生時代を懐かしみ、楽しんでもらおうというイベント)を開催しました。

記念行事のひとつである講演会には約2,000人の一般市民・高校生・大学生が、また、ホームカミングデイには、第1回生という大先輩や数十年ぶりの学友、ご家族連れなど約500人の卒業生がキャンパスを訪れました。

ご多忙のところご来場いただきました同窓生の皆様には、厚くお礼を申し上げます。



太田原会長から同窓会連合設立のご報告(於記念式典)



益川敏英氏(ノーベル賞受賞者)による記念講演会



各同窓会のパネル展示



ホームカミングデイの様子

「岩手大学学生支援基金」へのご協力依頼

岩手大学は、昭和24年(1949年)の創立以来、真理を探究する教育研究の場として、独創的・学際的な研究を通じて優れた学術文化を創造しつつ、幅広い教養と深い専門性を備えた人材を育成し、社会への貢献を図ってきました。

これからも地域社会とともに共生の時代を切り開いていくことを志に定め、「学生を主人公に、地域に開かれ、広く世界へ発信する」大学づくりをめざして参ります。

本学の新たな飛躍の鍵となる人材育成のためにも、学生に対する就学支援の一層の推進を図っていくことが重要であると考え、創立60周年を契機に「岩手大学学生支援基金」を創設することといたしました。

何とぞこの趣旨をご理解いただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年6月

岩手大学長 藤井克己

◆岩手大学学生支援基金は、

本学学生(留学生を含む)の就学等を支援することを目的に

(1)学資支援 (2)生活支援 (3)留学支援

などに使用していきます。

◆募金額

3千円以上、おいくらでも結構です。

◆寄附金の申込み

寄附金は、「郵便振替」と「銀行振込」によりお受けいたします。

詳細につきましては、本学ホームページをご覧ください。下記までお問い合わせ願います。

◆ご厚意に対する感謝

ご寄附いただいた全ての方に深く感謝の意をこめまして氏名、法人名等を「寄附者芳名録」に記して、岩手大学の歴史に未永く留めさせていただきます。

◆寄附金に対する税法上の優遇措置

この寄附金は、所得税法、法人税法による税法上の優遇措置が受けられます。

詳細につきましては、本学ホームページをご覧ください。下記までお問い合わせ願います。

◆岩手大学学生支援基金のページ

<http://www.iwate-u.ac.jp/foundation/>

◆問い合わせ先

岩手大学財務部財務企画課

〒020-8550盛岡市上田3-18-8

TEL: 019-621-6023 FAX: 019-621-6879

編集
後記

岩手大学同窓会連合が無事設立され、今回会報第1号を発行できることは、同窓会連合構想に長く携わってきたものとして感慨も一入です。この会報では、記念式典のあと実施されたOBの方の講演会の様子も掲載しておりますので、当日の雰囲気や少しだけでも感じて頂ければ幸いです。

自立した大学運営を目指すとき、岩手大学の強力なサポーターとしての全学的同窓会の枠組みの存在は極めて重要であり、それ故に設立に向けて尽力してきたとの自負もあります。これからの同窓会連合の活動に大いに期待しておりますが、緒に就いたばかりの組織であり、各方面からの様々のご支援が不可欠です。今後とも同窓生の皆様からのご支援ご鞭撻を宜しく願います。(F)

岩手大学同窓会連合会報 No.1

2009.8 発行

発行事務局

〒020-8550 盛岡市上田三丁目18-8

TEL.019-621-6994

FAX.019-621-6014

E-mail: dosokai@iwate-u.ac.jp